

杉丸太輸出、年間20万m³超

地域密着の集材力を発揮

瀬崎林業

瀬崎林業(大阪市、遠野嘉之社長)の2020年国産材輸出が、11月時点で19万3000立方mを超え、年間実績では20万立方mを上回る見通しだ。2010年の輸出開始以来着実に数量を伸ばしており、19年は約14万2000立方mだった。

同社は中国向けの杉丸太を主として、細島港や志布志港など九州の各港から国産材を輸出している。中国向け数量は19年比で5万立方m以上増加した。20年前半こそコロナ禍により事業展開に不透明さも漂ったが、中国の木材需要回復とともに引き合いが強まり、輸出数量が伸びた。

同社は、九州の林産業者と連携を深めた地域密着型の丸太集荷体制で集材力を発揮。また、複数の港を活用した集荷リスクの分散や中国市況の密な情報収集により、地域林産業者の信頼と中国需要をつかんだ。

型船に切り替えたことも、輸出量の底上げにつながっている。中国の丸太需要は中期的に増加が見込まれることから、21年も輸出量の上積みを目指す考えだ。

中国木材市場は現在、豪州産丸太の輸入停止やロシア産丸太の入荷減を受けて、ニュージーランド産材や杉の買い気が強まっている。ドル価も上昇傾向で、例年なら市況が停滞する年明け後の旧正月にかけても強含みが予想されている。遠野社長は「中国の需要に裏付けされた上げ相場。上海の港の丸太在庫も減少している」と需給環境を指摘する。

同社事業はこのほか、チリ産材を主力とした梱包材販売も11月から上向いている。中国産LVLやペトナム産合板も需要は安定。杉梱包材は大口の取引先を獲得しており、協力企業である製材工場からの定期的な仕入れが軌道に乗ってきた。

21年は、同社総売上における国産材輸出と各種梱包材販売の最適な売上比率の見極めを課題に挙げている。